ISSN－0913－1906
関西大学博物館彙報
2017年３月31日 発行

阡陵

No. 74

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]

にわとり（笹野一刀彫）

◉ 目　次 ◉

浮世絵「七福神けいこまち」を読み解く・・・・・・・・・・・・・・・・・・・岡　泰正　2
大山（おおやま）―日本遺産　大山詣り―・・・・・・・・・・・大村　泰久・大村　菊代　4
末永雅雄先生採集二上山西麓の大形打製石器・・・・・・・・・・・・・・・山口　卓也　9
ガラス乾板に記録された住吉大社の風景　・・・・・・・・・・・・・・・・・黒田　一充　10
御影・住吉の劇場と舞台写真　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤岡　真衣　12
創立130周年記念展示会
「関西大学のちから～伝統への自信 未来への考動～」「智から－叡智」に関して・・・髙橋　沙希　14

関西大学博物館
〒564-8680　大阪府吹田市山手町３丁目３番35号
Tel. 06-6368-1171（直通）　Fax. 06-6388-9928
http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/

浮世絵「七福神けいこまち」を読み解く

岡　　泰　正

本稿は、関西大学博物館所蔵になる大判３枚続きの浮世絵（錦絵）をめぐる謎解き、いわば博物館内でのギャラリートークのような内容である。

まずは、キャプション（題箋）的説明から。むかって右と中央の図にまたがって「七福神（しちふくじん）けいこまち」と読める内題が見える。各図には作者の署名、応需房種画（もとめによりて　ふさたねえがく）、好ニ付（このみにつき）房種画、とあり歌川房種の作品である。続いて、画中に年月印が摺り込まれ、文久２年（1862）と読み取れる。版元は木屋宗次郎。

歌川房種は、江戸末期の安政ごろから明治30年（1897）ごろまで江戸・東京で活動した浮世絵師で、歌川国貞の門人・歌川貞房の弟子である。姓は村井、名は静馬、画姓は歌川である。

この３枚続きの浮世絵は一見、七福神がくつろいでいる図なのだが、おのおののしぐさは、なにか意味ありげに見える。いったい「けいこまち」とは何なのか。実はこの浮世絵は、役者の一種のコスプレ、当時の人気役者たちを勢揃いさせたブロマイドなのである。

木札

むかって左図、左上に見える黒塗りに白く文字を記した木札が、役者名の種明かしである。読んでみよう。木札、右から「弁天たの」とあり、たのすけ。続いて「大こくしかん」で、しかん。「恵び寿訥」で、とっしょう。「びしゃ門ごん」で、ごんじゅうろう。「福ろくうざ」で、うざえもん。「寿老つる」で、つるぞう。最後に「ほていむら」で、むらえもん、というわけである。師匠が、道場や手習いの門弟たちの名を木札で掲げる習慣があったことを踏まえていると考えられる。札では、師匠の弁天が一番上座（むかって右）に掲げられているわけである。

これを整理してみよう。

右から　恵比寿／２代 澤村訥升、布袋／初代 坂東村右衛門、福禄寿／13代 市村羽左衛門（５代 尾上菊五郎）、寿老人／初代 中村鶴蔵、毘沙門／初代 河原崎権十郎（９代 市川團十郎）、大黒／４代 中村芝翫

弁天

左端の三味線を持った弁天（弁財天）は、美貌をうたわれた３代澤村田之助である。もとより琵琶を三味線に持ち替えた技芸をつかさどる女神。福神のなかの紅一点、琵琶を奏する弁天を邦楽の美人師匠に見立て、邦楽の稽古。お師匠さんの弁天に稽古をつけてもらうまで、気ままに遊んで待っている、鼻の下をのばした当時の市井の旦那衆を風刺しているものと思われる。役者個々の性格からして、さもありなんという見立ての妙が、描写に利かされているものと推定される。成駒屋、大黒の４代中村芝翫は、打ち出の小槌を脇に置いて稽古中、いたって神妙である。大坂道頓堀に生まれ、江戸で活動し、「大芝翫」と呼ばれた名優だが、持ち前の目の鋭さは抑え気味にして声をしぼっている。毘沙門の権十郎が、中央でひときわ豪華に、どっしりと貫禄豊かに描かれているところなど役者の格を意識している。

そして、インドの毘沙門と、中国の寿老人は、中国渡来の拳遊びをしているという趣向。拳遊びにつきものの脚付き杯を間に据え、いっそう異国情緒を漂わせる。拳の勝負に負ければ罰酒（罰杯）を飲むという遊びである。絵の中で、寿老人の左かたわらに置かれた酒次（さけつぎ）のジャグもヨーロッパ舶載のガラス器、あるいは中国製の金属器を意識しているのかも知れない。拳遊びは、朱盃などを両者の間に置いて、勝ち負けを競って飲みあうわけだが、この絵のように西洋風のガラス・ゴブレット―ギヤマンの杯も好んで用いられた。馬上盃という趣向か

も知れない。この杯が輸入品か、和製の鉛ガラスによる模製品かは、絵ではわからない。ともかくも異国趣味からワイングラスの器形が、宴席の座興に好まれたのは事実である。

では、弁天に何を習っているのか。稽古をつけてもらっている内容は、歌舞伎役者の話であるから、やはり歌舞伎伴奏の長唄、あるいは、可能性が高いのは長唄の対極となる端唄を習っていると、見たほうが自然である。市井の三味線教授は、天保の改革で禁止され、裏を返せばそれほど盛んだったわけだが、解禁となったそれ以降は、いっそう三味線の習いごとが流行した。

一見すると、小唄の習いごと、とも考えられるが、小唄の三味線は、撥を使わずにつまびくだけなので、撥を持っている弁天の姿から察して、やはり役者たちが端唄を習っている、というふうに考えたほうが自然だし、面白くもある。逆に当の役者が、伴奏の長唄を習う図とは、あまりにそのものすぎて、設定として芸がないだろう。

いずれにせよ、当代の人気役者たちが「神様」であるのに行儀の悪い無作法な稽古の待ち方で、退屈しのぎに思い思いのことをしているところが、この絵の利かせどころである。右端のえべっさんは、まかないの板前という役割。

弁天に扮しているのは、屋号は紀伊国屋、3代澤村田之助である。この弁天らしく宝尽くしの帯をしめ、宝珠の冠をつけた美貌のお師匠さんが、本図の見せ場である。スターの登場。美しさと芸の上質さをたたえられた澤村田之助（弘化2年〈1845〉～明治11年〈1878〉）は、宙乗りの演技中に落下、このときの負傷から脱疽をわずらい、その後、悪化して、慶応3年(1867)ヘボン博士（J.C.Hepburn アメリカ長老派教会の医療伝道宣教師。ヘボン式ローマ字の創案者で、彼が編纂した和英語林集成の表記法がもと。明治学院の創始者）の執刀によって左足をひざ上で切断し、アメリカ製の義足をつけて舞台をつとめた。しかし、病の進行はとまらず、最終的には右足も切断、右の手首から先、左手の小指以外のすべての指を失い、それでもなお女形の名優として舞台をつとめ続けた。驚嘆すべき気力と技能の持ち主だったのである。明治5年(1872) 正月興行を途中降板し、その後は舞台に復帰することなく、芝居茶屋、芝居小屋の経営を試みたがふるわず、病は悪化の一途をたどり、最後は精神に変調をきたして明治11年(1878) 33歳の若さで亡くなった。悲劇の名優であった。

そしてまさに、この「七福神けいこまち」が描かれた文久2年（1862）の「紅皿欠皿」の宙乗りで、その運命の落下事故がおこるのである。この「稽古待ち」で描き出された田之助は、舞台の姿ではなく、「役者似顔」であるから、事故のあとか先かは、問題にできない。七福神の図は吉祥性から正月の版行かも知れない。いずれにしても、この浮世絵が運命を分ける年に描かれていることが、後世の私たちの気持ちを粛然としたものにさせるのである。ちなみに、蔓つき三つ巴（ともえ）の柏紋（恵比寿の紋）をつけた恵比寿が鯛をさばく「まかない」に徹しているのは、2代訥升が、田之助の七つ違いの実兄だからで、稽古をつけてもらうには、身内であるため、接待係にまわっていることが読み取れる。この恵比寿は、習い事の客ではないのである。

浮世絵はその時代を写し取っている。美術を専科とする私は、西洋風の器形を持つガラス器の使われ方に確かに興味を持つが、学術を越えて、名優・澤村田之助のその後の哀切な運命に寄せる思いの方が、この浮世絵を見る時、いっそう強いのである。

《七福神けいこまち》歌川房種画 文久2年(1862)
木版色摺 版元・木屋宗次郎（関西大学博物館蔵）

神戸市立小磯記念美術館　神戸ゆかりの美術館　館長

大山（おおやま）―日本遺産　大山詣り―

大　村　泰　久・大　村　菊　代

1．はじめに

昭和58年（1983年）に東京都内から神奈川県伊勢原市に転居した。家族で毎年のように初詣に訪れる大山阿夫利神社・下社は大山の中腹にある。その大山が今年日本遺産「大山詣り」に認定された。日本遺産「大山詣り」を伊勢原市の配布チラシは次のように説明している。

「大山詣りは、鳶などの職人たちが巨大な木太刀を江戸から担いで運び、滝で身を清めてから奉納と山頂を目指すといった、他に例をみない庶民参拝である。そうした姿は歌舞伎や浮世絵にとりあげられ、また手形が不要な小旅行であったことから人々の興味関心を呼び起こし、江戸の人口が100万人の頃、年間20万人もの参拝者が訪れた。

大山詣りは、今も先導師たちにより脈々と引き継がれている。首都近郊に残る豊かな自然とふれあいながら歴史を巡り、山頂から眼下に広がる景色を目にしたとき、大山にあこがれた先人の思いと満足を体感できる。」

ここでは、大山詣りが日本遺産になった信仰の地・大山の歴史について少し紹介したい。神奈川県公文書館紀要、並びに伊勢原市教育委員会の刊行書物などを参考にしている。

写真１：平塚市から望む大山（中央）（2016年11月）

2．古くから信仰の地であった大山[1]

大山は、相模平野中央に位置し、標高1252mあり、伊勢原市、秦野市、厚木市にまたがっている。八世紀中ごろに成立した万葉集・東歌に大山は「相模峰の雄峰見過ぐし忘れ来る　妹が名呼びて吾を哭し泣くな」と詠まれた。

大山の山岳信仰は、昔から徐々に形成されていったようだ。山頂からは、古墳時代の土師器片・須恵器片、平安時代の経筒・経塚壺などが出土している。また、大山の山頂には昔から石尊大権現（せきそんだいごんげん）と呼ばれる巨大な自然石のご神体を祀った大山阿夫利神社・上社がある。

写真２：大山阿夫利神社・下社（2016年11月）

3．阿夫利神社と大山寺[1]

阿夫利神社は、10世紀前期に作成された『延喜式』神名帳に相模国十三座の一つとして大住郡の項に「阿夫利（あふり・あぶり）神社」が記されている。このことから、草創は８世紀前半に遡ることができる。大山阿夫利神社社伝には、今から2200年前の第十代崇神天皇の代に創建されたと記されている。

大山寺は、755年に東大寺別当良辨僧正によって開創された。『続群書類従』に収められている『相模国大山寺縁起』には東大寺別当良辨僧正が大山寺を開創し、聖武天皇は当寺を国家安穏を祈願する勅願時とし、相模、安房、上総三国の租税の一部を与え寺院経営を行わせたとある。大山寺は、762年行基の遺命により弟子光増が不動明王像を彫刻して本堂に安置したと記されている。また、大山寺は阿夫利神社の別当寺となった。

山岳信仰を基とした修験道が盛んになり、大

山寺が建立され、阿夫利神社を管理する別当寺となった。ここに、石尊大権現と一体化した神仏習合の大山信仰が形成されていったようだ。

大山寺は878年の地震に伴う大火により倒壊消失した。884年に安然（天台宗）により大山寺は再興された。大山は、天台宗系の僧侶たちの山林修行の場となった。

平安後期・末期は、大山は在地武士糟屋（かすや）氏の支配する糟屋荘内に組み込まれた。糟屋荘は安楽寿院に寄進され、後に鳥羽法皇の皇后美福門院得子、さらにその子八条院暲子へと伝領された。

写真３：良辨の滝

写真４：雨降山大山寺

４．鎌倉時代、室町時代の将軍に崇敬された大山寺[1]

糟屋氏は源頼朝の御家人になった。『吾妻鏡』によると、1184年に頼朝は高部屋郷の水田五町歩、畠八町歩を、三代将軍実朝は丸島郷（現平塚市）の五町二反を大山寺に寄進し、天下泰平、武運長久などを祈願している。

雨降山大山寺のホームページ「お寺の歴史」によると、1192年、源頼朝は「太刀」を奉納して戦勝祈願し、見事に成就した。ここから、有名な「納め太刀」の風習が始まった、とある（図版１）。

大山寺はその後荒廃する。文永の頃（1264年～1275年）に鎌倉に来た真言宗の学僧願行坊憲静によって復興する。願行は、異国（蒙古）降伏の秘法を修する目的で大山に登った。百日間の難行苦行に入り、師である意教坊頼賢から与えられた鉄造不動明王を前に一心不乱に祈ると鉄造不動明王がぱっと目を見開いたという。この時の不動明王の姿をそのままに、二体の鉄造不動明王像を鋳造した。その一体が大山寺の不動明王像（国重要文化財）である。今も大山寺の本尊である。

室町時代、足利将軍家、足利関東公方家、上杉関東管領家も大山寺に大山寺領及び諸堂の造営費を寄進した。大山寺は時の幕府の庇護の下、大山の経営を維持した。

室町後期は、将軍の庇護がなく大山は衰微した。

５．戦国時代、小田原北条氏に支配された大山[1]

戦国時代の大山寺は、小田原北条氏より支配された。大山修験勢力は、天台宗本山派玉龍坊の配下に組み込まれた。寺領として中郡高森郷178貫467文が大山寺に与えられた。1590年の豊臣秀吉の小田原征討に際して、大山修験勢力は小田原北条方に付き、徳川方に激しく敵対した。

図版１：歌川豊国　『大當大願成就有が瀧壺（江戸時代・文久三年）』（伊勢原市教育委員会蔵）

写真５：大山山頂に向かう登拝門（現在は、登山者のために扉は半開になっている）

６．家康の山内改革（慶長の改革）[1]

江戸時代になると、大山修験勢力が小田原北条方に付き、激しく敵対したことから、1605年、家康は山内改革を行った。大山山中から修験勢力を一掃した。山中居住は清僧のみとした。宗旨は古義真言宗に転宗させた。幕府は法印実雄を大山寺初代学頭に任命して八大坊（十二坊の筆頭）に常駐させた。硯学領として実雄に小蓑毛郷（現秦野市）57石余を与えた。そして寺領百石を御朱印地として大山寺に寄進した。家光も大山寺の寛永の大修理の際に造営費として一万両を与えた。

７．石尊大権現、大山不動尊詣りで賑わった大山（江戸時代）

大山が昨今よく知られるようになったのは、平成元年（1989年）NHK の大河ドラマで「春日局」が取り上げられてからであろう。雨降山大山寺の「お寺の歴史」によると、徳川家光が世継ぎになるように春日局が不動明王に祈願し、その後家康に直訴した、とある。春日局は家光の命を受けてその後も大山を再三訪れている。

下山させられた修験者達は蓑毛と大山の麓に住み、御師となった。宿坊、土産物屋経営、祈祷、檀家回りなど、大山信仰の教宣活動をして生活を支えた。その結果、関東一円に大山講の信仰圏が拡大していった。江戸時代の中期以降、関東一円の庶民たちは、五穀豊穣、商売繁盛、招福除災、無病息災などの現世利益を求めて盛んに大山詣りを行ったようだ。『大山不動霊験記』の中の説話によると、農民の話が最も多く、次に町人、商人となっている[1・2]。

夏山（旧暦６月27日～７月17日）の時期は、石尊大権現が祀られている山頂の石尊宮への登拝門が開き、大山は大いに賑わった（登拝門から上は女人禁制であった）。大山詣りの参詣者は、まず大山寺不動尊に参拝し、大山寺の本宮である石尊宮に参拝するために大山の山頂へと登った。大山詣での人々が往来する道には、大山道の道標が整備され、大山街道と名がつくほどに参詣者が多かった[3]。

大山山頂では、江戸時代に石尊宮は焼失と再建を数度繰り返している。そんな中、安永７年（1778年）石尊宮、大天狗社、小天狗社、徳一宮、雨風宮の上棟祭が行われた。その時の祝詞に、阿夫利神社の呼称が使われている。江戸時代はほとんど阿夫利神社の呼称は使われていなかったが、神々の総称として阿夫利神社の呼称を使

図版２：五雲亭貞秀『相模国大隅郡大山寺雨降神社真景（安政五年）』（伊勢原市教育委員会蔵）

用したようだ[3]。

安政の大火（1854年12月29日～1855年１月２日）により、石尊宮など五社と倶利伽羅龍王堂などを残して大山全体が大火に包まれた[4]。

８．雨降山大山寺と大山阿夫利神社

明治元年（1868年）、明治政府による神仏分離令が発令される。御師猪股儀太夫の日誌によれば、「大総督の下知として山内の坊中、別当、不動尊を引き払うようにとあり、また人的な支配体制を一掃すること」と記されている[5]。同年、神仏分離によって不動堂（大山寺）は取り払われて山麓に移され、その他の堂塔も破却された[6]。大山寺の鉄造不動明王像等は現存している。

大山寺は現在の場所（それ以前に来迎院があった場所）に移り、明王寺として再建される。雨降山大山寺の「お寺の歴史」によると、明治18年（1885年）、周囲20km内の村による木材の寄進、日本各地の浄財の寄進により、９年間にのぼる難工事の末本堂が竣工し、盛大に祝われたとある。大正４年（1915年）、明王寺は観音寺と合併して雨降山大山寺の名称に戻った。大山寺は真言宗大覚寺派になった。山号は雨降山[7]。

明治６年（1873年）、阿夫利神社は大山寺跡に仮拝殿が建てられた。同年、権田直助が、足柄県より阿夫利神社祠官を命じられる[4・5]。

権田直助は、大山の支配体制を神道化することを努力し、今の体制を確立した。権田直助によって御師は「先導師」に名称を変えた。先導師達は、熱心に檀家回りをして、阿夫利神社を参拝する大山講が増えていったが、先導師数、檀家数は共に減っていった[4]。

阿夫利神社は大山阿夫利神社となり、大山阿夫利神社には、（本社）大山祇大神（おおやまずみおおかみ）、（奥社）大雷神（おおいかづちのかみ）、（前社）高龗神（たかおかのかみ）が祀られた[6]。女人禁制は廃止となった。

９．現代にも息づく信仰の山

12月、大山阿夫利神社先導師内海三太夫宅を訪れた。神殿（写真６）のある部屋に隣接する部屋で話を伺った。明治６年、大山阿夫利神社祠官になった権田直助翁は、大山の人々と所縁のある人なのでお呼びした、とのこと。大山阿夫利神社や地域にとても貢献した人であると聞いている、と話された。毎年命日にはお祭りを行っている、とのこと。大祭について伺った。春の大祭（４月５日～４月20日）には豊作を祈願するために農業従事者の講中や代表者が多く大山を訪れる。夏の大祭（７月27日～８月17日）には、多くの大山講の講中が訪れる。大山講には、漁業関係者の講も多い。大山は雨が多く降るので、昔から雨降山（ウコウサン又はアフリサン）と呼ばれる。祭神は雨の神なので、天候に関係する農業、漁業関係者（魚河岸の方も含む）等の信仰は篤い。また、商業、飲食業、芸能関係者など幅広く信仰を集めていると伺った。近年は、講数、先導師数は減少傾向であるが、後継者の育成もされている。ただし全国様々な講があるが、先導師（御師）数については大山阿夫利神社が最も多いらしいと伺った。

写真６：内海三太夫氏宅内（伊勢原市）

写真７：現在の大山ケーブルカー（大山寺駅）

先日会った伊勢原に生まれ育った90歳の老婦人は、自分が子供の頃には、田んぼのあぜ道を５、６人の白装束の男の人達が集団で「懺悔、

懺悔、六根清浄」と大声で唱えながら大山に向かっていくのを目にしたと話してくれた。7歳の七五三のお祝いには、阿夫利神社に兄が私を徒歩で連れて行ってくれた、とも。

今は門前町までバスが運行し、大山ケーブルカー駅から阿夫利神社駅までは、ケーブルカーが運行する。元旦には、大山への初詣の人達で門前町は賑わう。大山では年間を通して多くの祭りが執り行われていて、人々の大山への信仰は今も息づいている。

写真8：雨降山大山寺の階段　秋の紅葉が映える

10. 大山の周辺の史跡

大山の東側に位置する日向山（ひなたやま）の中腹に国内三大薬師の一つ「日向山宝城坊日向薬師」がある。716年に行基が開創したもので、本尊木造薬師如来などは国の重要文化財に登録されている。源頼朝と政子が篤く信仰し、たびたび参拝している。日向薬師を過ぎてさらに山側に進むと、718年開創とされる雨降山石雲寺がある。石雲寺の手前には壬申の乱に敗れてこの地に逃走してきた言われる大友皇子の墓がある。

大山の西側には、「三ノ宮比々多神社」があり、社伝によれば創建は紀元前660年とされる。国土創建の神、酒造りの神、玉造りの神を祀る。

11. おわりに

発掘調査によれば、28000年前から大山の麓に人々が暮らしていたことが分かっており、伊勢原の名は、江戸時代に現在の三重県当たりの出身者が切り開いたことに由来していると言われている。現在約10万人の人口を抱え、観光都市に生まれ変わる努力が続けられている。箱根の温泉地域から1時間以内、都心からも1時間程度のアクセスで立ち寄れるところであり、週末は老若男女のハイカーが大山にむかう。

謝辞

関係資料の提供にご協力いただいた伊勢原市教育委員会文化財課に感謝する。また、近現代の大山信仰の姿について直接取材にご協力戴いた大山阿夫利神社先導師内海三太夫氏に謝意を表する。

参考文献

[1] 川島敏郎、「古記録から見た大山信仰の諸相」―『大山寺縁起絵巻』・『大山不動霊験記』を中心として―、神奈川県立公文書館紀要、第六号、pp. 302-324、2011年.

[2]「伊勢原市内の大山道と道標」、第二版、伊勢原市教育委員会、2012年.

[3] 手中正、「安永の石尊宮普請」、伊勢原の歴史（伊勢原市史編集委員会編）、第十号、pp. 24-34、1995年.

[4] 宮崎武雄、「相州大山　―今昔史跡めぐり―」、風人社、2013年.

[5] 松岡俊、「幕末明治初期における相模大山御師の思想と行動　―神仏分離を中心として―」、伊勢原の歴史（伊勢原市史編集委員会編）、第五号、pp. 58-76、1990年.

[6]「相模大山街道」、大山阿夫利神社編、1987年3月.

[7]「大山寺縁起」、雨降山大山寺山主　千葉興全編集、1984年.

参考資料

[A] 内海弁次、「往古の大山」、伊勢原の歴史（伊勢原市史編集委員会編）、第六号、pp. 55-66、1991年.

[B] 湯山学、「中世伊勢原をめぐる武士たち」、伊勢原市教育委員会社会教育課編集（教育委員会発行）、1991年.

[C] 圭室文雄、「伊勢原市域における大山信仰―「大山不動霊験記」を中心に―」、伊勢原の歴史（伊勢原市史編集委員会編）、第2号、pp. 1-17、1987年.

[D] 伊勢原市HP、いせはら文化財サイト；www.city.isehara.kanagawa.jp

[E] 雨降山大山寺HP; http://www.oyamadera.jp/

[F] 大山阿夫利神社HP; http://www.afuri.or.jp/goyuisyo.html

[G] 斎藤勢吾、「ISEHARA・おもてなし隊」の調査研究報告書、調査報告5「相模大山の神仏分離事情と権田直助」（2013年10月18日脱稿）.

大村泰久：博物館運営委員　システム理工学部教授

大村菊代：歴史愛好家

末永雅雄先生採集二上山西麓の大形打製石器

山　口　卓　也

末永雅雄先生の花押のある紙箱に収められ、昭和30（1955）年に「近鉄電車大阪線関屋駅西南方石屑堆積地帯中」で検出されたサヌカイト製大形打製石器２点がある。この石器は、昭和61（1986）年頃、関西大学教育後援会刊行「末永雅雄　常歩無限　関西大学考古学二十年の歩み」の編集を担当していた米田文孝氏を介して、末永先生から「研究するように」との指示とともに託され、現在関西大学博物館が保管している。

現在の近畿地方の石器研究の成果に照らせば、右の石器は、弥生時代近畿地方中央部に普及するサヌカイト製打製石剣の素材厚を減ずる初期整形工程であると判断される。左の石器は、強い風化が進行しているが、幅広剥片を両面から剥離した縄文時代石核であろう。

今年、平成29（2017）年は、大正６（1917）年に京都帝国大学の濱田耕作教授や大阪毎日新聞社長の本山彦一氏が河内国府遺跡を発掘してから、ちょうど100周年にあたる。国府遺跡の発掘は、福原潜次郎氏採集の大形石器がヨーロッパの旧石器に類似しており、国府遺跡に旧石器時代に相当する遺跡がある可能性を京都帝国大学の喜田貞吉講師が指摘したことを契機として実施された。調査の結果、縄文時代の埋葬人骨や玦状耳飾が大量に発見されて、当初の旧石器時代の所産かどうかの検証はあいまいとなったが、学史上近畿地方における近代的な考古学研究の嚆矢となった。

末永先生は、京都帝国大学考古学教室で濱田教授の指導を受けていた頃、国府遺跡の大形石器（現京都大学総合博物館蔵）を実見したことがあり、この２点との形態的類似に注目して、末永先生自らが選別した可能性がある。

末永先生は、続いて昭和31(1956)～32(1957)年に、奈良県立橿原考古学研究所で「二上山文化総合調査」を行なった。坂詰仲男同志社大学教授らが先史班を組織して、二上山を中心とした無土器文化の探査、二上山産サヌカイトの分布調査、大阪府側の河南町飛鳥周辺のサヌカイト産出地調査、二上山屯鶴峯付近の遺跡調査などを研究課題とした。また、その一環で昭和32（1957）年３月に国府遺跡の小規模発掘を行なった。末永先生自身が明示したことはないが、この一連の調査は、二上山北麓で採集した大形石器および京都大学総合博物館蔵国府遺跡の大形石器の両者が旧石器時代の所産であるのかどうか、自ら確かめるということも主要な目的とされたのではなかったろうか。

末永先生の国府遺跡発掘の直後、山内清男、鎌木義昌両氏らによって、国府型ナイフ形石器、瀬戸内技法関連石器群が黄色粘土中から出土し、近畿・瀬戸内地域の旧石器時代研究が始まった。末永先生の着眼と一連の調査の意図は埋もれてしまったが、この２点の石器は、末永先生の、広く、そして深い目的意識の証拠として位置づけられるものであろう。

大形打製石器と末永先生花押のある紙箱

大形打製石器（左：17.2cm　右：18.4cm）

関西大学博物館学芸員

ガラス乾板に記録された住吉大社の風景

黒　田　一　充

デジタル化が進み、学生たちは板書もスマホで撮影するようになるなど、大量の写真を記録する時代になった。少し前のフィルムカメラの時代は、現像やプリントの経費を考えて１コマ１コマ丁寧にシャッターを切っていたのと記録に対する考え方がまったく異なってしまった。

フィルムの前の写真は、ガラス板の表面に臭化銀乳剤を塗って感光させるガラス乾板で撮影していた。明治の後半から昭和初期にかけて盛んに使われたが、破損しやすく重いため、フィルムの普及で使われなくなった。

大阪市住吉区の住吉大社には、600枚をこえるガラス乾板が保存されている。箱に収まったままの状態のため、全体の枚数も何が写っているのかもよくわからなかった。今回、初めてデジタル化の作業をおこない、祭りや神事に関わる473コマの作業が終わったので、何が記録されていたのかを紹介したい。

まず撮影時期については、昭和７年（1932）の元日付けで発行された『住吉大社写真帖』の掲載写真と同じものがあり、この前後の時期であることがわかった。

写真１は、西側上空から撮影した境内の様子である。前面の石燈籠のところが整備されているのがわかる。大正６年（1917）から境内の風致改善工事が始まり、参道の敷石設置や神楽殿の新築、社務所の増築などがおこなわれた。石燈籠も電灯線の地中化工事にともない、境内の奥にあったものが正面側へ移された。写真からわかるように、今日見られる住吉大社の景観は、この時期に整備されたのである。

写真１　上空から見た住吉社（1931年ごろ）

写真２　玉出のだいがく（1931年）

整備がほぼ終了した昭和６年（1931）４月４日から３日間、竣工奉告祭がおこなわれた。

写真２は、その時の写真だが、反橋前の絵馬堂付近に３基のだいがく（台額・台舁）が見える。柱の上部に赤い布を円錐形にした鉾と傘状の髯籠（ひげこ）を取り付け、下部には78個の提灯を吊している。住吉大社の摂社だった玉出の生根神社から出されたが、昭和20年（1945）の空襲で２基が焼失し、岡山に疎開していた１基だけしか今は残っていない。この３基が揃った写真は、貴重な記録である。

住吉大社の石鳥居からは、まっすぐ海浜へ向かって参道が延びていた。社前の海浜は長狭浦（ながおのうら）とよばれ、堺へ神輿が渡御する夏の住吉祭には、事前にここで神輿を潮水で清めた。住吉の潮湯

写真３　もとの長狭浦（右奥に高燈籠）

といって、参詣者たちも海水につかる様子が江戸時代の絵画に描かれている。現在は阪神高速道路が通り、その下に流れる細井川付近がかつての海岸線にあたる。

写真３は、昭和初期の長狭浦の様子である。薪炭商の船を横付けする岸辺には、水浴する女性や子供たちの姿が見える。右手奥の高燈籠は、鎌倉時代末に建てられたとされ、海からの住吉大社の目印だったが、昭和25年（1950）のジェーン台風の被害などで解体された。昭和49年（1974）に、この写真の位置から東へ約200メートル離れた場所に再建されたのが、現在の高燈籠である。

写真４　反橋を渡る大神輿

昨年（2016年）の神輿渡御祭では、目方700貫（約2.6トン）といわれる大神輿が、75年ぶりに担がれた。その大神輿が反橋（そりはし）を渡ってきたところを撮影したのが、写真４である。慎重に橋を下りてくる様子と、それを見守る大勢の人びとの姿をよくとらえている。

この夏の風景に対して、写真５は初詣の写真である。住吉大社は毎年大阪府下で一番初詣客が多い神社だが、当時も大勢の人びとが参拝していた様子が記録されている。右側の神社名の標柱と石鳥居の間に、小さな笠を売る露店が見える。縁起物の住吉踊で、今も正月には、反橋の前に店が出ている。この当時の女性はまだ和装が多く、男性は和装・洋装半々だが、ほとんどの人が帽子を被っている。それにしても、氷の

写真５　初詣風景（鳥居前）

のれんの店は、冬に何を売っているのだろうか。

石鳥居の奥にある神池に架かる反橋は、橋板に滑り止めはなく、足を掛けるための穴が空いているだけだった。その様子をとらえたのが、写真６である。石鳥居から橋を上っていくのはそれほどでもないが、社殿側の下りは穴から池の水面が見えることもあり、恐る恐る下りる参拝客の様子がうかがえる。

祭りや行事を主として撮影した写真だが、当時の人びとの服装や風俗、景観など様々な情報が記録されており、歴史資料としての活用ができる。しかしその一方、古い写真は撮影者が亡くなるとフィルムとともに廃棄されることが多くなっている。どのように保存と活用をすべきか、喫緊の問題となっている。

写真６　初詣風景（反橋）

本稿は、三菱財団人文科学研究助成による研究成果の一部である。

文学部教授

御影・住吉の劇場と舞台写真

藤　岡　真　衣

明治期以降、大阪や神戸には多くの劇場が建ち、歌舞伎のほかにさまざまな演劇が上演されて賑わいをみせた。阪神間の劇場や興行については、大正10年（1921）に刊行された『武庫郡誌』に詳しく、旧住吉村には「龍美座」、西隣の旧御影町には「文玉亭」があった。

龍美座と文玉亭に関する資料は、あまり残っていないが、今回、両劇場に関わる歌舞伎の舞台写真（小栗栖健治氏所蔵）を実見する機会を得たので、ここに紹介したい。

写真は５点で、それぞれ台紙に貼り付けられており、その裏面には、劇場名、年月日、演目名、人物名などのメモが残っている。このうちの３点の台紙の裏面には、「御影町瀧美座」、「御影町滝美座」、「御影町文曲亭」とあり、おそらく、これらは「龍美座」と「文玉亭」を示していると考えられる。

龍美座は、現在の阪神電車住吉駅の西側、住吉南町５丁目に位置していた。前身は「朝日座」と称し、御影町の黒田駒吉が、神戸市小野から劇場を移して設立した。その時期は不明だが、明治24年（1891）12月の『大阪毎日新聞』には、歌舞伎の上演を知らせる記事がみえる。

明治34年（1901）以降、朝日座の所有者は２度変わったが、ひと月の公演日数は10日に満たなかったという。

大正２年(1913)に、大阪市の横山たけが所有することになり、大正５年(1916)１月、辰の年にちなんで、龍美座へと改称された。

写真１は、その翌年の大正６年（1917）12月12日に上演された歌舞伎の演目『菅原伝授手習鑑』の「車曳(車引)」を撮影したものであり、舞台の中央に、右から松王丸、梅王丸、桜丸の３人と、背後に藤原時平が写っている。

写真２は、大正11年（1922）12月18日に、『本朝廿四孝』の三段目切を上演した際に撮影したもので、舞台上には役者だけでなく関係者の姿もみられる。

龍美座のあった付近は、六甲山地の湧水を用いた酒造地として栄えてきた地域であり、観客には、労働者などが多かった。この頃には、地域の発展にともなって、ひと月に25日以上継続して興行するようになっていた。

写真１　裏面のメモ「大正六年拾二月十二日」「御影町瀧美座ニ於テ」「菅原車場」

写真２　裏面のメモ「大正十一年十二月十八日」「御影町滝美座ニ於テ」「本朝二十四孝三段目切」

一方の文玉亭は、御影町御影字上西（現在の御影本町８丁目）にあった。『武庫郡誌』には、明治42年（1909）７月17日に設立されたとしているが、明治38年(1905)７月の『神戸新聞』に、文玉亭で浮世節を興行していたことを伝える記事がある。

大正３年（1914）１月から同年12月にかけての文玉亭の興行回数は13回で、その内容は、浪花節、喜劇、万歳、奇術、尺八吹奏会であった。

写真３は、大正５年12月12日に、『鬼一法眼三略巻』の「菊畑」を上演した際に撮影したものである。舞台の上手（右側）には浄瑠璃の太

写真３　裏面のメモ「大正五年拾弐月拾二日」「御影町文曲亭ニ於」「菊畑」

夫が座り、舞台上には、右から湛海、鬼一法眼、皆鶴姫、智恵内、虎蔵に扮した役者が写っている。

その後、龍美座は、昭和８年（1933）に改装されて「御影劇場」と名を変え、映画演芸の常設館になった。文玉亭は、大正13年（1924）まで存続していたことが確認できるが、昭和になってからも興行していたかは不明である。

このようにみてくると、これらの写真は、龍美座と文玉亭の興行が栄えていた時期の様子を伝えている。

また、写真の台紙の裏面には出演者と考えられる名前が記されており、いずれも芸名ではないことから、素人芝居の可能性が高い。『住吉村誌』には、明治年間に素人芝居が盛んで、御影・住吉の同好者が一座を組んで龍美座などで歌舞伎を演じていたことが記されている。写真は、そうした人びとを撮影したものかもしれない。

残りの２点は、撮影場所がはっきりしないが、写真４は、大正８年（1919）11月25日に上演された「大蔵卿御殿物語」（『鬼一法眼三略巻』の

写真４　裏面のメモ「大蔵卿御殿物語」「大正八年十一月廿五日」

写真５　「菊畑」の出演者か
※裏面にメモはみられない

「一條大蔵譚」）を撮ったものである。写真５は、撮影時期や演目名も不明だが、おそらく「菊畑」の出演者を写したものと考えられる。ただ、それぞれの台紙表面の右下には、「御影藤田」（写真１、３、４）、「大阪市北区西野田中江町　本田北雷写真館」（写真２）、「林繁雄写真場　西宮札場筋」（写真５）などの写真館の名前が印刷されている。写真４、５は、阪神間にあった別の劇場の舞台を撮影したものかもしれない。

阪神間にあった小さな劇場に関する調査・研究はあまり進んでいない。こうした写真が活用されれば、当時の劇場の舞台や出演者の様子をより具体的に知ることができる。

最後になりましたが、所蔵資料の調査を御快諾していただいた神戸女子大学古典芸能研究センター客員研究員の小栗栖健治氏、旧御影町とその周辺に関する資料について御教示を賜った神戸深江生活文化史料館館長の大国正美氏、同館副館長の道谷卓氏に心から御礼を申し上げます。

〈主な参考文献・参考資料〉

・前田慶三『魚崎町　住吉村　御影町　新地図　阪神沿道案内』前田工務所、1921年
・武庫郡教育会編『武庫郡誌』武庫郡教育会、1921年
・『大日本職業別明細図　索引付住所入　信用案内　第五一三号　兵庫県　御影町　魚崎町　精道村　本山村　本庄村　住吉村』東京交通社、1937年
・谷田盛太郎編『住吉村誌』武庫郡住吉村、1946年
・続・御影町誌編纂委員会編、道谷卓監修『続・御影町誌』御影地区まちづくり協議会、2014年

関西大学非常勤講師

創立130周年記念展示会

「関西大学のちから～伝統への自信 未来への考動～」「智から－叡智」に関して

髙 橋 沙 希

平成28（2016）年10月５日（水）から11月14日（月）を会期として、関西大学創立130周年記念展示会「関西大学のちから」が２会場で開催された。

第１会場では関西大学博物館において「関西大学のちから～伝統への自信 未来への考動～」を、第２会場では大阪歴史博物館８階の特集展示室において「〔特集展示〕関西大学蔵 本山コレクションの精華」を開催した。

特典として、会期中に両会場を観覧された方に、先着で一筆箋やエコバックなどのオリジナルグッズを進呈し、好評を得た。

第１会場の「関西大学のちから～伝統への自信 未来への考動～」では、「大阪に生まれた大学として、知の精神を受け継ぎ、『考動』力あふれる人材の育成拠点を形成し、人と人とのつながり（＝学縁）を大切にするなかで、さまざまな『ちから』を蓄えてきました。」と記し、「知から－大阪」「道から－伝統」「智から－叡智」「馳から－スポーツ」「千から－コレクション」の５つのテーマで、関西大学所蔵の名品を紹介した。

エントランス

ここでは筆者が担当した「智から－叡智」について触れる。

「智から－叡智」では東西学術研究所・泊園記念会から３点、図書館から10点、博物館から３点、計16点を出品し、大坂で叡智を吸収しながら活躍した画家たち、つまり大坂画壇の絵画作品を中心に展示した。また、京都で作陶されている木村盛康氏からご寄贈頂いた陶芸作品なども陳列した。

近年では注目されつつある大坂画壇であるが、これまではほとんど注目されてこなかった。その要因として、近代美術史学が主に西洋美術との関係を重視したこと、日本美術史の基盤を作った岡倉天心が大坂画壇を評価しなかったことなどが挙げられる。そのため大坂画壇の作品の多くが失われたり、海外に散在したりしている。

そのような中、関西大学図書館では、長年にわたって大坂画壇の絵画を蒐集してきた。現在では、大坂に関係する約700点もの貴重な作品を所蔵している。これらの作品は主に本学文学部の山岡泰造名誉教授と中谷伸生教授によって蒐集・研究が進められてきた。それに伴い図書館では、『関西大学蔵 大坂画壇目録』（関西大学図書館、1997年）や『関西大学創立120周年記念 大坂画壇の絵画―文人画・戯画から長崎派・写生画へ―』（関西大学図書館、2006年）などを刊行している。

今回展覧会に出品された大坂画壇の作品をいくつか紹介しておくと、まず木村蒹葭堂（1736～1802）の《花蝶之図》（図書館蔵）〔図１〕が挙げられる。絹本着色で、縦33.2cm、横21.5cmの小作品である。画面右下には、墨書で「撫清人鄭山如設色於澄心斎中」（清人の鄭山如を撫って澄心斎の中で描いた）と記されている。

〔図１〕木村蒹葭堂《花蝶之図》

木村蒹葭堂は、酒造業を営みながら、本草学などの多くの学問に触れた博学であり、文人交流の要ともなった人物である。池 大 雅（1723～76）に師事し、文人画家として絵画

を描いているが、それらは《花蝶之図》と同じく小作品が多い。

《花蝶之図》には、画面右側から左下に向かって生える、淡い朱色と緑色の葉を持った太い枝が描かれている。強弱のある輪郭線からは、樹木の生命力を感じる。その枝に絡まるように、青紫色の朝顔が茎を伸ばす。画面左上には、それらの植物に引き寄せられた、澄んだ青色の目と白色の羽を持つ蝶が優雅に飛ぶ。背景に何も描かれていないことによって、植物や蝶のモチーフの鮮やかさと美しさがより際立っている。

木村蒹葭堂の絵画は評価が高いとはいえないが、この作品はまさに彼の実力を示す作品だといえる。

上田耕夫(1759/60～1831/32)の《寿福図》(図書館蔵)〔図2〕は絹本着色で、「寿福」、つまり長命と幸福が主題となっており、画面中央には七福神の一人である福禄寿が笑顔を浮かべている。その隣には福禄寿の持ち物である経巻を背中に乗せた、つぶらな瞳の鹿が立っている。画面の周囲に描きこまれている赤い描き屏風や、青空の背景に記された文様のような文字が美しく、非常に手の込んだ作品である。上田耕夫の作品はほとんど遺存しておらず、本作は大変貴重だといえよう。

大坂・難波出身の女性画家である野口小蘋(1847～1917)の《溪山秋靄》(図書館蔵)〔図3〕は明治31(1898)年に描かれた絹本着色の作品である。縦185.7cm、横85.0cmの大画面には靄のかかる岩山の美しい秋景が広がる。山頂を見上げる高遠、前から後方の山を眺める平遠、画面奥の山を眺める深遠の三遠方の構図で描かれている。加えて、荒井菜穂美氏は、渓流については西洋の遠近法である一点透視図法が意識されていることを指摘し、「南画的な構図に西洋的な空間表現が無理なく組み合わされている。」(注1)と述べている。つまりこの作品からは、野口小蘋の新しい着想をも理解することができる。

〔図2〕上田耕夫《寿福図》

〔図3〕野口小蘋《溪山秋靄》

四条派に学んだ深田直城(1861～1947)の《水辺芦雁図》《雪中船舶図》(図書館蔵)〔図4〕は、紙本墨画淡彩で、閑々たる水辺と芦雁の群れが描かれた双幅の作品である。

右幅の前景に水辺で戯れる芦雁、遠景には数隻の船がある。一方左幅は雪景色で、画面中央に大きく船が描かれ、遠景には芦雁が飛ぶ姿がみえる。全体的に穏やかで丁寧な筆致となっており、画面には落ち着いた雰囲気が漂っている。

〔図4〕深田直城
左幅《雪中船舶図》　右幅《水辺芦雁図》

以上の作品の他にも今回の展覧会では、多くの貴重な資料が展示された。それらの資料は、まさに関西大学が、知の精神を受け継ぎ「考動」力あふれる人材の育成拠点であることを証明する一端だといえよう。

(注1)荒井菜穂美「明治時代の南画　野口小蘋を中心に」(『文化交渉東アジア文化研究科院生論集』3号、2014年)、13頁。

参考文献：
中谷伸生『大坂画壇はなぜ忘れられたのか 岡倉天心から東アジア美術史の構想へ』(醍醐書房、2010年)。

博物館学芸員

◘ 博物館だより

◇2016（平成28）年11月４日に関西大学創立130周年を迎えるにあたり、創立130周年記念展示会「関西大学のちから」を10月５日から11月14日を会期として、関西大学博物館と大阪歴史博物館の２会場で開催しました。第１会場関西大学博物館では「関西大学のちから～伝統への自信 未来への考動～」を、第２会場大阪歴史博物館８階の特集展示室では「関西大学蔵 本山コレクションの精華」を開催し、会期中第１会場1,784名、第２会場49,920名の方に来場いただきました。

◇2016（平成28）年度ミュージアム講座「本山コレクションの精華―本山彦一と大阪、関西大学―」を３日間大阪歴史博物館にて開講し、70名の方から聴講の申込みをいただきました。

10月９日「本山彦一と近代大阪の新聞事業と文化」
大阪歴史博物館学芸員　船越幹央

10月23日　第１部【講演】「本山コレクションの来歴
―木村蒹葭堂・神田孝平・本山彦一―」
宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査官　徳田誠志

第２部【討論】「本山彦一と大阪、大阪毎日新聞、関西大学をめぐって」
パネリスト　徳田誠志、船越幹央
進行　長谷洋一〈関西大学博物館前館長〉

11月６日「本山コレクション　ペルーの土器の由来」
毎日新聞専門編集委員　佐々木泰造

◇12月４日から９日まで博物館実習展を開催しました。今年度は47名の実習生が「大坂商人の世界」「お金の姿」「明治の装い」「上方の粋もの展～多様性が育んだ美～」の４班に分かれ、博物館学課程の集大成として展示を構成しました。会期中には414名の方にご来場いただきました。

◇2017（平成29）年１月16日から２月28日まで「関西大学と村野藤吾～設計図・建築写真・絵画～」を開催しました。537名の方にご覧いただきました。

◇本年度下半期、古屋芳彦氏より太刀一振（人間国宝　宮入昭平作）、本学校友の遠山慶一氏より「神点　御名」、附札文書「改名窺」計２点、校友廣田琢也氏のご母堂廣田千惠氏からご祖父冬木理紗男氏作、漆芸作品４点、さらに校友藤尾隆志氏から、古文書（三浦内膳宛　井伊兵部少輔書状）１点の寄贈がありました。今後、博物館で充分活用していきたいと考えています。また、伊吹文明氏より、社会貢献事業ならびに教育研究に充当して欲しいとの格別のご厚意を拝受いたしました。

・・・編集後記・・・

表紙は、今年の干支にちなんで、本館収蔵の民芸品「にわとり」（笹野一刀彫 山形県米沢市）です。千数百年前から受け継がれてきたアイヌ伝統のイナウ技法による作品で、アブランコというやわらかい木をサルキルという道具で削り、簡単な彩色を施しています。一本の木を切り離さずに作られています。

2017（平成29）年度春季企画展「河内国府遺跡発掘100周年―近畿地方先史時代考古学のはじまり―」を４月１日から５月21日まで、河内国府遺跡発掘から今年で100周年を記念して開催いたします。また、テーマ展として「関西大学と村野藤吾」を同時に開催いたします。

関西大学博物館彙報　No. 74　2017（平成29）年３月31日　発行
関西大学博物館　　編集